

辰野町立小・中学校のあり方に関する提言書

令和 8 年 3 月 27 日

辰野町立小・中学校あり方検討委員会

令和8年3月 日

辰野町教育長

宮澤 和徳 様

辰野町立小・中学校あり方検討委員会

辰野町立小・中学校のあり方に関する提言書（案）

一 はじめに

I 想定を上回る少子化の進行

辰野町の人口は、2000年（平成12年）22,407人であったが、50年後の2050年（令和32年）には11,518人と約49%の減少が見込まれる。

一方、小学校児童数（辰野西小学校、辰野東小学校、辰野南小学校）は、2010年（平成22年）1,064人であったが、20年後の2029年（令和11年）には556人と約48%の減少、半数になってしまうことが見込まれる。

2029年（令和11年）の入学予定者は68人であり、1学級の人数が10人を切る学年も出てくることが想定される。68人は、単純に計算すると、町内全体で2学級に収まってしまう人数である。

II 少子化に伴う教育環境の変化

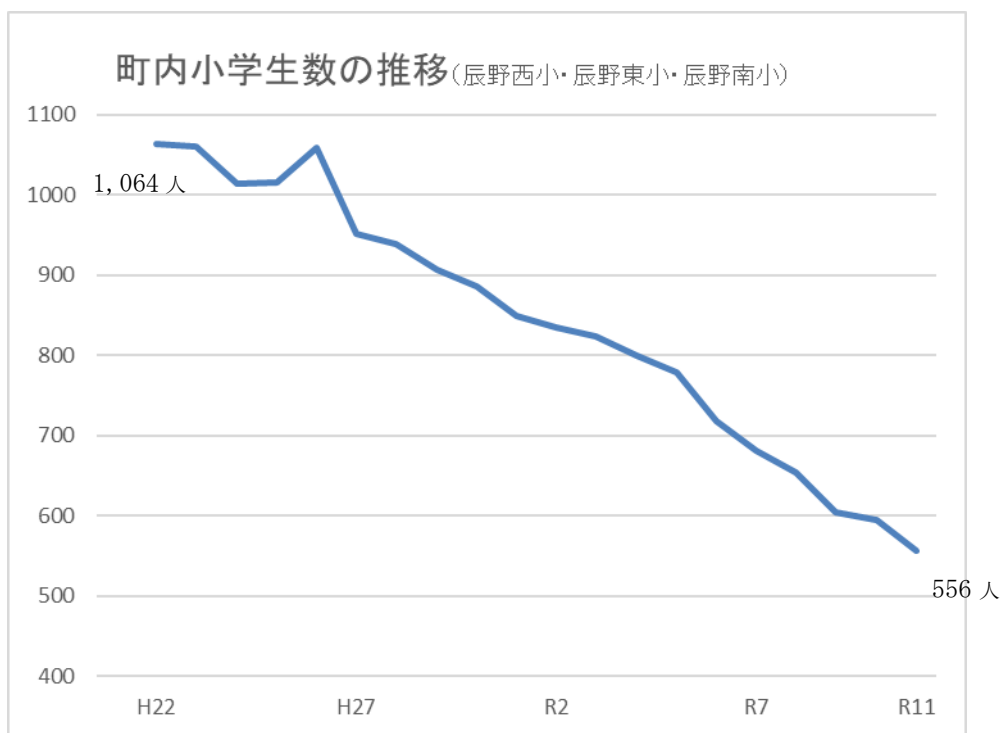
現状の学校配置では、3つの小学校とも小規模校になることが想定される。学びの集団が小さくなることにより、人間関係が固定化したり、多様な考えを基により深い学びを実現させることが難しくなったり、多人数で一つのものを創り上げる体験ができなくなったりする等の課題が生じる。

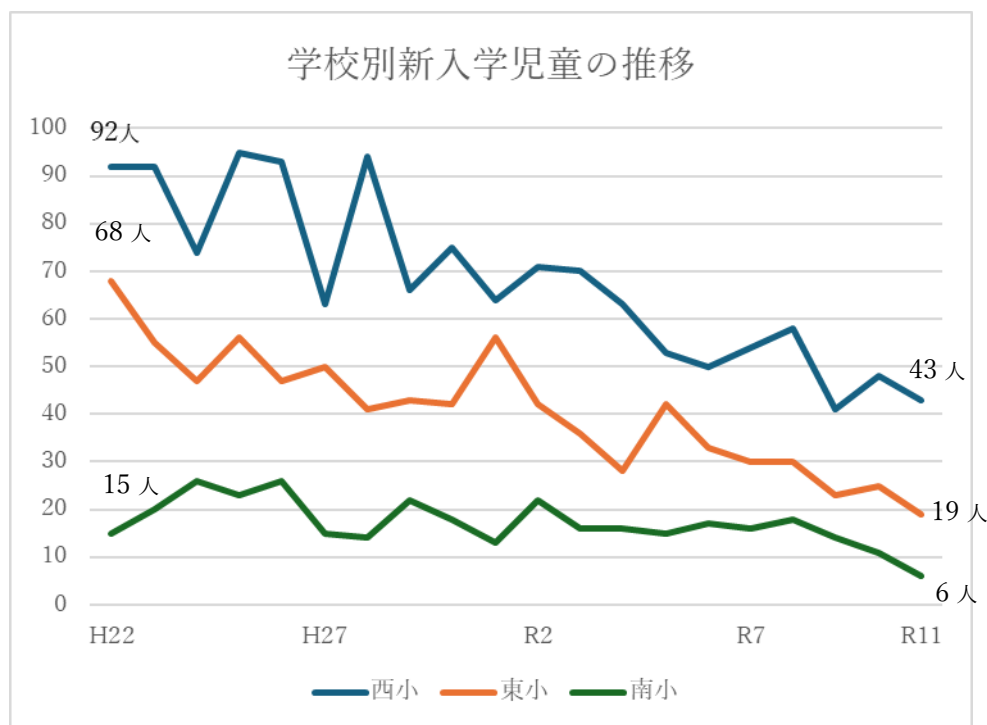
教職員の数の減少は、学級数の減少を上回るため、活気ある良好な教育環境を継続的に維持していくことが困難な状況になる。

しかし、少子化が進展しても義務教育の質的充実は常に確保されなければならない、将来を展望した新しい学校の形を検討していく時期に来ていると考える。

III 少子化に対応した新たな学校

このような状況の中、2023年（令和5年）9月に制定された「辰野町立小・中学校あり方検討委員会設置要綱」に基づき本検討委員会を立ち上げ、2028年度（令和10年度）以降の小・中学校のあり方について、町の教育理念と方針を受け、急激に進む少子化社会にあっても小・中学校が魅力ある学びの場となるために、望ましい教育環境等について、2024年（令和6年）1月より11回にわたって検討を重ねてきた。少子化に対応した新たな学校のあり方、学び方・教室の風景、学校と地域との連携等について討議を進め、これからの時代にふさわしい小・中学校のあり方について、ここに「提言書」としてまとめた。





<検討事項>

(1) 少子化の進展に対応した新たな学校づくりに関する事項

① 少子化の進展に対応した望ましい教育環境のあり方に関する事項

a : 小・中学校の配置及び通学区に関する事項

・学びの適正規模、適正配置及び学校制度 等

b : 小・中学校間の連携のあり方に関する事項

② 小・中学校と地域との連携のあり方に関する事項

a : 辰野町の良さ、特徴を生かした新たな教育課程等のあり方に関する事項

・学校制度及び教育課程の概要 等

b : 教育課程外の活動のあり方に関する事項

c : 放課後及び課外活動の位置づけ及び地域連携に関する事項 等

(2) 就学前から一貫した支援・指導のあり方に関する事項

① 多様化する児童生徒への支援・指導のあり方に関する事項

② 保育園から小学校・中学校の連携のあり方に関する事項

③ 保育園・幼稚園から高等学校、短期大学まで揃った町の良さを生かした学校づくりに関する事項

(3) その他、教育委員会が必要と認める事項

二 提 言

I 少子化の進展に対応した新たな学校づくりに関する事項

1 少子化の進展に対応した望ましい教育環境のあり方に関する事項

(1) 急激な少子化を考慮し、学びの集団としての人数、複数の学級を確保し、活気ある良好な教育環境を継続的に維持していくために、3つの小学校（辰野西小学校・辰野東小学校・辰野南小学校）を何らかの形で集約（再編）したい。

<提言の趣旨>

- ① 子どもたちが一定規模の集団生活を送る中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて、一人一人の資質や能力を伸ばしていく学びが期待できる。
- ② 「主体的・協働的な学び」等、多様な学習形態を取り入れた教育が可能になるため、子どもたちが社会で必要とされる資質・能力を身に付けることが期待できる。
- ③ 学年に複数の学級が保障されることにより、クラス替えが可能となり、固定化された人間関係がリセットされ、子どもたちは、より多くの友だちと人間関係を築くことが期待できる。

(2) 小・中学校の9年間で育てたい人間像に向け、9年間の連続した学び、活動が可能となるよう、小中一貫教育(小中一貫型学校・義務教育学校)を推進したい。

<提言の趣旨>

- ① 町教育委員会の基本理念、育てたい人間像に沿って、小学校と中学校が同じ教育目標のもと、義務教育9年間の教育課程を系統的に編成した教育活動を行うことにより、子どもたちの学びが校種を超えても途切れることなく紡がれていくことが期待できる。また、中学校教員が小学校で「教科担任制」を実施することにより、より専門的な学習が可能となると共に、中学校の学習内容へのスムーズな接続が期待できる。
- ② 小1～中3という、広い年齢層が同じ環境で様々な学年の子どもと交流することにより、下級生の上級生への憧れや尊敬の気持ち、あるいは上級生の下級生への思いやりや自主性、指導力等が育まれることも期待できる。
- ③ 教職員にとっても小中一貫教育を行うことにより、小・中学校の枠を越えて互いに連携・協働し合いながら、よりよい教育の創造を目指していくことが期待できる。また、多くの教職員が目子どもたち一人一人を継続して見守っていくことも期待できる。

(3) 学校を集約することにより生じる、通学や地域とのかかわり等の課題について配慮したい。

＜提言の趣旨＞

- ・学校が遠くなり歩いて通えない子どもが増える
- ・通学時の安全面が心配
- ・道草ができない
- ・地域の自然や地域社会とのかかわる機会が減る
- ・学区が広くなることにより学校支援ボランティアのかかわりが難しくなる
- ・今までのように学校と地域とがかわれるのか
- ・人口減少により、地域の中でも子どもとかわれる大人が減っていく

等の課題が生じることが考えられる。

これらの課題については、今後検討した上で新たな学校の姿を構築していきたい。

(4) 学校を集約する時期、場所、集約した後の学校制度等の詳細については、将来にわたり望ましい教育ができる形態や環境を見据え、十分な検討を行ったうえで進めていきたい。

2 小・中学校と地域との連携のあり方に関する事項

(1) 集約した新たな学校でも、学校と地域とで連携・協働して子どもたちを育てていくことを大事にしたい。

＜提言の趣旨＞

- ① 小・中学校では現在、地域の「ひと・もの・こと」を中心に多くのことを学んでいる。新たな学校でも、町の魅力、特色を生かした教育課程を編成し、体験を通した学びを大事にしながら、町への愛着を深めたり誇りを持ったりする心の育成を期待したい。
- ② 引き続き学校支援ボランティア等学校と地域とで連携・協働して子どもたちを育てていきたい。また、PTAと地域とのつながりも大事にしたい。地域の方々と共に取り組む探究的な学びも大事にしたい。
- ③ 町には地域が学校を支える気風があり、従来より学校と地域が育てたい子ども像を共有しながら連携・協働して子どもたちを育ててきた。子どもたちが9間を通して町の様々な人々との出会いの中で、自らの生き方を考えることができるよう、今後も子どもたちと地域とのつながりを期待したい。
- ④ 子どもたちが地域の行事等に参画することにより、地域で地域の子どもの育てていくことも大事にしたい。
- ⑤ 子どもたちにとって、地域に育ててもらっていると感じられる学校、ここで育ててもらってよかったと思えるかかわりをめざしたい。

(2) 自然体験、社会体験等五感を使った学び、キャリア教育等社会とつながる学びを大切にしたい。

<提言の趣旨>

- ① 今後ICTの活用がさらに進んだりAIが導入されたりしても、五感を使った実体験を「学び」の原点としなければならないことは言うまでもない。

子どもたちは、具体的な体験や事物とのかかわりをよりどころに、感動したり、驚いたり、疑問をもったりしながら学んでいくものである。人生の中で最も感受性豊かな小・中学生期の子どもたちにとっては、実体験を通しての学びが、次の新たな学びのためのエネルギーとなる。

- ② 積極的に校外に出て、自然体験や社会体験を行うことを通して、心身共に健康でバランス感覚を持った子どもの育成を期待したい。

(3) 教育課程外の活動のあり方、放課後の子どもの居場所、課外活動の位置づけ及び地域連携については、今後別の組織（委員会）、新たな場で検討していきたい。

<提言の趣旨>

- ① 中学校部活動の地域展開、小学校放課後学童クラブのあり方等については、別の組織において検討を重ねていきたい。

II 就学前から一貫した支援・指導のあり方に関する事項

1 多様化する児童生徒への支援・指導のあり方に関する事項

(1) 多様な背景を持つ全ての子どもたちが共に学び、共に育つ教育環境を検討したい。

<提言の趣旨>

- ① 障がいのある子どもや学習面・行動面で著しい困難を示す子ども、個性・特性のある子ども、外国にルーツのある子ども※、また、特異な才能を持つ子どもなどに対して、状況によっては少人数の学びの場を取り入れる等、多様な背景を持つ全ての子どもたちが共に学ぶことで、一人一人の子どもがその子らしく育っていくことを大切にしていきたい。

※ 外国籍児童を含め、日本語を家であまり話さないすべての児童生徒

- ② 不登校・不登校傾向の子どもや、人間関係（友だち・先生・家庭、いじめ等）の状況の変化等、一人一人の状況を踏まえた学びの場、居場所を提供することを通して、誰一人取り残さない教育を進めていく必要がある。

2 保育園から小学校・中学校の連携のあり方に関する事項

3 保育園・幼稚園から高等学校、短期大学まで揃った町の良さを生かした学校
づくりに関する事項

(1) 保育園・幼稚園から高等学校、短期大学まで揃った町の良さを生かした教育
の推進に幅広く取り組んでいきたい。

<提言の趣旨>

- ① 幼保・小の連携については、子どもの姿や保育・教育環境、職員や教員の指導・
支援等について互いに学び合うことを通して、それぞれの保育・教育の一層の充
実に期待したい。
- ② 保育園・幼稚園から小・中学校、さらに高等学校から短期大学まで揃った町内
の教育環境を有機的に生かし、より効果的な教育の提供を図ると共に、それぞれ
が抱えている教育諸課題にも対応するため、各教育機関どうしの連携、交流によ
る教育環境の整備・向上に引き続き取り組むことを期待したい。

III 付帯事項

本提言にあたり、次の点について配慮が必要であると考え、付帯事項として加筆
しておきたい。

- 1 町教育委員会がこの提言を受けて町と共に新たな学校の具体的な検討を行う
にあたり、次の点に配慮されたい。
 - (1) これまで各学校が築き上げてきた地域とのつながり、少人数の教育のメリッ
ト等、現在の学校のよさが新たな学校でも活かされるよう検討されたい。
 - (2) 小中一貫教育については、9年間の連続した学び、活動のメリットデメリッ
トを、子どもの側、教職員の側からも改めてしっかりと検討し、それらを踏ま
えた新しい学校づくりでありたい。
 - (3) 具体的な検討の過程において、町民、保護者、児童生徒、教職員の意見を聞
き、それらを踏まえ、議論を深めながら進めていきたい。
 - (4) 学校を集約することは、新たな町づくりととらえ、地域振興や地域の拠点づ
くり、コミュニティ機能の維持等、今後の町の基本構想の中で、町と町教育委
員会が連携して検討を進めていきたい。

IV パブリックコメントに寄せられたご意見

(a)「急激な少子化を迎えていますが、減少しても子どもたちが多くの友だちの様々な考えに触れ自分の考えを深めること、認め合い協力し合うこと、切磋琢磨し資質や能力を伸ばしていくことが大切である。このことから町内小学校を何らかの形で集約したい。」この論点に対してどのように考えますか。

◎寄せられたご意見

① 小学校の集約に賛成のご意見

- 児童数の急激な減少で学級規模が極端に小さくなる。
 - ・10人未満の学級が生まれ、教育環境の維持が難しい。
- 一定規模の集団で学ぶことが重要。
 - ・多様な考えに触れ、協力し合い、切磋琢磨する経験には人数が必要である。
- 中学校も含めた将来的な教員配置の困難。
 - ・2学級編成になると全教科の教員をそろえられない可能性が出てくる。
- 「新しい学校をつくる」という前向きな発想。
 - ・統合をマイナスではなく、夢のある学校づくりの機会と捉える。

② 集約に賛成はするが、次の点を懸念するご意見

- 少人数教育のメリットも再評価すべき。
 - ・目が行き届く、個々に寄り添える、集団が苦手な子の居場所になる。
- 多様性への対応が一校化で逆に難しくなる可能性。
 - ・選択肢がなくなり、合わない子の受け皿がなくなる懸念。
- 集約の前に教育のあり方そのものを議論すべき。
 - ・国際社会で活躍する人材育成など、より大きな視点が必要。

③ 集約に反対・懸念のご意見

- 地域の歴史や文化を背負う学校を簡単に統合すべきでない。
- 住民への説明や議論の順序が不十分ではないか。
 - ・まず地域住民に問いかけるべき、拙速な進め方は禍根を残すのではないか。

(b)「義務教育の9年間について、小・中学校を分けずに連続した学び、活動ができるようにしたい。」この論点に対してどのように考えますか。

◎寄せられたご意見

① 賛成のご意見

- 中1ギャップの解消や、学習・生活・人間関係の安定につながる。
- 教科担任制を導入し、授業が充実するように考えていくことが大事である。

- 異年齢交流や探究活動の充実などが図られる。
- 中学校教員の確保や教育の質向上のために義務教育学校化が必要と考える。
- 最終的には義務教育学校として魅力ある学校づくりを進めるべきである。

② 条件付きの賛成、要望、具体的な提案

- 教員側にメリットが大きいなら検討に値する。
- 現場の教員の意見をもっと聞くべきである。
- 小1～4は地域に根ざした学び小5～中3は専門性の高い学びなど、段階的な一貫教育にしたい。
- 専門家による検討も必要である。

③ 反対のご意見

- 歴史ある学校を簡単に統合すべきではない。
 - ・小規模校の価値
 - ・地域の支えや伝統
 - ・大規模校が優れているとは限らない
 - ・統合ありきで議論が進んでいるように見える。
- 学校が複数あることで子どもの逃げ場が確保されるため、今は小中一貫にすべきでない。

(c)「学校を集約することにより生じる課題や、学校と地域とのかかわりが希薄となるかもしれない。」この論点に対してどのように考えますか。また、どのような方法なら解決できると考えますか。

◎寄せられたご意見

① この論点に対しての主な課題

- 地域とのつながりが弱まる懸念。
 - ・集約することで、地域とのつながりやかかわりが少なくなっていく。
 - ・登下校のあいさつや、地域住民との自然な交流が失われる心配がある。
 - ・伝統行事や地域活動への参加が減少する。
- 地域ボランティア活動の継続が難しくなる。
 - ・これまで熱心に活動していたボランティアが、集約後の学校でも、そのまま協力を仰げるかどうか難しい面がある。
- 通学手段・生活環境の変化による不安。
 - ・スクールバス利用など、保護者・児童が経験のない通学方法に不安がある。
 - ・学童クラブの場所など、保育園との関係で再設計が必要となる。
- 地域に子どもがいなくなることによる地域衰退への懸念。
 - ・学校がなくなることで地域の活力が低下するのではないか。

② 以上の課題に対しての解決策・提案

○地域と学校の接点を意図的に増やす仕組みづくり。

- ・「地域を学ぶ日」を設け、地域の歴史・文化を学ぶ機会を定期的に確保する。
- ・学年に応じて地域へ出向き、「事実から学ぶ学習」を充実させる。
- ・地域行事に子どもが参加しやすい仕組みを整える。

○地域ボランティアの再編・活性化。

- ・地区ごとのボランティアを「地域の集合体」として再構築し統合後も活かす。
- ・地域人材を授業に積極的に招くなど、役割を明確化して参加しやすくする。

○義務教育学校を“地域に開かれた学校”として運営。

- ・地域学習・行事参加・地域人材活用を教育活動の中心に据える。
- ・学校と地域が共働する体制を再構築する。

○通学・生活面の不安への丁寧な対応。

- ・スクールバスの安全性確保や運行方法の工夫。
- ・学童クラブの配置を保育園との関係も含めて再検討。

○旧校舎の地域拠点としての活用。

- ・旧学校を「新たな地域文化創造の拠点」として活用し、地域の衰退を防ぐ。
- ・地域の伝統文化を継承する場として位置づける。

○学習の充実。

- ・総合学習や体験学習を軸に、子どもの自立性を育む教育を展開。
- ・地域と連携しながら、子どもの主体性を伸ばす学習環境を整える。

(d)「学校を集約しても、自然体験や社会体験など五感を使った学び、キャリア教育など社会とつながった学びを大切にしたい。」この論点に対してどのように考えますか。

◎寄せられたご意見

○五感を使った体験的学習の重要性。

- ・自然体験・社会体験・キャリア教育など、体験を重視した学びは学校規模に関係なく大切。
- ・町の自然・産業・地域との関わりを生かすべきである。
- ・特にキャリア教育は、継続的に担当できる外部人材が必要。

○より多くの仲間と関わる学びの価値。

- ・五感を使った体験的学びに加え、多様な友人と関わることで視野を広げる。

○学校を集約しなくてもこのような学びは可能。

○本当に学校に任せなければならない学びなのか、家庭でやるべきことはないのか、地域や社会が場を設ける必要があるのではないか。

(e) その他(自由記載)

◎寄せられたご意見

① 学校集約・統廃合への賛否と多様な意見。

- 住民の意見を広く聞くべきという声が多い。
- 「集約ありき」に見える進め方に懸念がある。
- 小規模校の価値を重視し、存続を求める。

② 現状の分析が不十分。

- 現在の各小中学校のよさや課題等が認識されていない(教職員の声も含めて)。
- 小規模校や少人数の学級と学力等との関係が不明確である。

③ 子どもの学びを中心に考えるべきである。

- 子どもの意見表明権を尊重し、当事者の声を聞くべきである。
- 多様な背景(障がい、外国ルーツ、特異な才能など)を持つ子どもへの対応を重視すべきである。
- 本当に一人一人に向き合い寄り添った学びの場を確保してほしい。

④ 通学距離・スクールバス等の生活面の課題。

- 遠距離通学は子どもへの負担が大きく、基準づくりが必要。
- スクールバスを高齢者の移動にも活用するなど、地域交通との連携も考えられる。

⑤ 少子化と将来を見据えた教育のあり方。

- 少子化が進む中、早期に義務教育学校の検討を進めるべきである。
- 一方で、少子化を理由に教育を縮小すると、さらに少子化を招くとの懸念もある。

⑥ 新しい学びの場づくりへの提案。

- 従来型の学校にとらわれず、子ども・大人が一緒に対話しながら新しい学びの場を創るべきである。
- プールを学校ではなく全天候型施設として整備するなど、町全体の魅力向上も合わせて考えていきたい。

⑦ 地域コミュニティと学校の関係。

- 学校は地域の核であり、安易な統廃合は地域の衰退につながる。

⑧ 教育環境の質と教職員の働きやすさ。

○教員が余裕を持って働ける環境が、子どもにとっても良い教育につながる。

○人的・時間的ゆとりを確保するために、集約は必要である。

⑨ AI 時代の教育への危機感。

○デジタル化・AI 時代における子どもの感性の育ちが懸念される。

○自然体験や地域の環境を活かした教育が重要である。

三 検討の経緯

I 第1回 2024 年（令和6 年）1 月 25 日（木）午後 6 時 30 分～

1 委員会設置要綱の確認

2 正副委員長選出

・委員長：増澤 利定 さん（学識経験者）

・副委員長：小口 美景 さん（一般公募）

3 協議事項

（1）新たな「辰野町立小・中学校あり方検討委員会」の立ち上げについて

学校を取り巻く社会的環境は大きく変化し始め、全国的規模で進む人口減少・少子化は、辰野町においても同様であり、かつ深刻な問題となっており、3 年半余に及ぶコロナ禍がこの問題に一層拍車を掛けてしまっている。

少子化により子どもの数が減少していても、社会性を身に付ける場としての学校の教育環境の水準は維持されなければならない。そこで、少子化に対応する学校のあり方を協議していきたいと考え、「辰野町立小・中学校のあり方検討委員会」を立ち上げることにした。単純に、子どもの数が減少するので複数の学校を一つにまとめて検討は終わりということではなく、一つにするだけでよいのか、これからの社会を生き抜く子どもたちへの学校教育として、統合したその先どのような学びが期待できるのか、地域とはどのような関わりができるのかまで、深い協議をお願いしたい。

（2）町内小・中学校の現状について

町内の 18 歳未満の状況から地域別数、学校別推定入学児童数を説明。2012 年（平成 13 年）県内で統廃合になった小学校、辰野町内の小中学校の歴史を説明。

（3）検討委員会の進め方について

委員会は 2 ヶ月に 1 回の開催を予定。毎回議事録を作成し、委員確認の上、資料と共にホームページへ掲載。協議を進める中で、県内先進地の視察を実施

し、大まかな論点整理ができたところで、パブリックコメントの実施を予定。

Ⅱ 第2回 2024年（令和6年）4月25日（木）午後6時30分～

1 協議事項

（1）委員会開催内容及びスケジュール

今後の委員会の大まかな検討事項について目安を提出、意見をいただく。令和8年2月に委員会としての提言を辰野町教育委員会に提出する。

（2）辰野町小中学校児童生徒数の推移について

令和6年、令和10年（推計）の町内4小学校と1中学校の児童生徒数を、資料を元に発表、各委員に理解をいただく。

（3）ワークショップ「辰野町の特色を生かした学校のあり方、地域と連携した教育課程のあり方」について

4テーブルに分かれて「辰野町の特色を生かした学校のあり方、地域と連携した教育課程のあり方」をテーマにワークショップ（ワールドカフェ方式）を行う。

◎こんな学校ができたらいい

- ・児童生徒数、学級数の多い学校。多くの人とかがわることができ、様々な体験が可能になる。複数の学級があることで学級編成替えが可能になり、人間関係の面からもよい。
- ・学級の数が少なくて他に行く場所がないと、学校に行きずらくなる。
- ・学校を一つにまとめる。クラスマッチや遠足等の行事を皆と一緒に共通の目的をもって楽しむことができる。
- ・辰野町の特色を生かし、保育園から短大までの一貫校にする。
- ・現在のニーズに合った多様性を持ったカリキュラムを、小中一貫校にして9年間で系統的に学習する。中1ギャップもなくなる。
- ・今の各学校の魅力や特色を大切にしたい一貫校に。
- ・1・2・3年は少人数、4・5・6年は大人数（辰野モデル）
- ・子どもたちの様々なニーズに対応でき、また、様々な選択肢のある学校。多様性を持った子どもたちが学べる環境にあるとともに、つまずいた時の居場所が確保できるように。
- ・子どもも親も教師も笑顔があふれ、みんなが元気で楽しめる学校。いじめ、不登校のない学校。
- ・通学での学び、体験も大切にしたい。

◎子どもたちにこんな学びをさせてあげたい

- ・自然と触れ合う教育を大切にしたい。
- ・自然体験、社会体験等体験を大切にしたい学び。
- ・多様性、多人数の中で、様々な体験をさせてあげたい。
- ・キャリア教育等社会とつながる学びを。

◎地域はどのようにかかわったらよいか

- ・子どもと大人との触れ合いを大切にしたい。
- ・地域で子どもを育てることを大事にしたい。
- ・地域の思いを大切にしたい。
- ・地域の人も一緒に楽しめる学校。
- ・学校の中に公民館を。
- ・地域の特色を生かした教育を。
- ・放課後の子どもたちの学びの確保を。
- ・地域との協力等、学童のあり方を考えたい。
- ・地元の思いとしては、保小を残したい。

◎その他

- ・スピード感をもって進めたい。
- ・1 学年 10 人以上なら存続した方がいい。
- ・町としても子どもを増やす方法を考えたい。

Ⅲ 第3回 2024 年（令和6 年）7 月 9 日（火）午後 6 時 30 分～

1 協議事項

（1）資料の確認

前回お持ち帰りいただいた資料の確認

「辰野町立小・中学校のあり方に関する提言書（平成 29 年 9 月）」「町内小中学校の今後に対する辰野町教育委員会の見解」「辰野町の目指す教育ビジョン」について、資料に基づいて説明する。

（2）グループ討議「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方について」

「前回のワークショップの論点整理」「これからの学校教育に求められること」「令和 10 年度～12 年度辰野町児童生徒数」の資料をもとに、3 グループに分かれてグループ討議を行う。

テーマ「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方」

～少子化の進展に対応した学校～

～多様な子どもたち一人一人を大切にする学校～

～これからの社会を生き抜く子どもたちを育てる学び～

～地域と共に歩む学校～

◎学校を集約する

- ・人とかかわりが多く持てる。
- ・学級数が維持でき学級編成替えが可能である。
- ・豊かな体験ができ、多様性を大切にしたい学びも可能。
- ・教職員の確保ができる。
- ・集中してお金をかけることができ、施設・設備面からもよい。

◎集約にあたって出された意見

- ・小中一貫校、義務教育学校にする。
- ・まずは小学校を集約し、いずれ小中まとめる。
- ・西小と東小で大きな学校、南小を小さな学校。選択、多様性、ニーズに対応できる。
- ・低学年は地域、高学年は一つ。通学、地域とかかわりへの配慮。
- ・集約すると、地域との連携が難しくなるのでは。

◎その他

- ・不登校・いじめへの対応を。
- ・つまづいた時の居場所の確保が必要。
- ・地域との連携を大切にしたい。
- ・カリキュラムをどの様にしていくか。
- ・専門的な学びができるように。
- ・どのような教育を大事にしていくかも考えていきたい。
- ・10名の基準はこのままでよいのでは。

IV 第4回 2024年（令和6年）10月4日（金）午後6時30分～

1 協議事項

（1）グループ討議「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方について」

「前回のワークショップの論点整理」をもとに、3グループに分かれてグループ討議を行う。

テーマ「これからの時代にふさわしい辰野町の学校のあり方」

少子化の進展に対応した新たな学校

～学校を集約するにあたってのメリット、課題等～

◎学校を集約することのメリット

○少子化への対応

- ・少子化から見ると集約がどうしても必要。
- ・人口の見通しからいうと集約せざるを得ない。
- ・思い切ったやり方をしないと新しいものは生まれない。

○多くの人数

- ・多くの人とかかわれる。

- ・いろいろな考えにふれることができる。
- ・大きな学校で切磋琢磨し、社会で生きていく力をつける。
- 複数の学級
 - ・学級編成替えが可能となる。
 - ・人間関係がリセットできる。
 - ・固定化された序列が崩れる。
 - ・学年としての活動に幅が生まれる。
- 施設・設備面
 - ・一つにお金かけられる。
- 教職員の確保
 - ・多くの人数が確保できる。
- ◎学校を集約することのデメリット・課題等
 - 通学の問題
 - ・歩いて通えない 道草ができない 体験が不足
 - 地域とのかかわり
 - ・地域感情、地域の文化の問題。
 - ・学校支援ボランティアをどうするか。
- ◎新たな学校のかたち
 - 小中一貫校
 - ・小中の連続した学びが可能。
 - 義務教育学校
 - ・9年間一貫した教育課程で系統的に学べる。
- ◎課題等への対応等
 - 低学年は地域、高学年は一つ。 →通学、地域とのかかわりへの対応
 - つまづいた時の居場所
 - ・学校の中で小さな居場所の確保。
 - ・リモートで対応。
 - 不登校、いじめを前提とせず、不登校、いじめのない学校をめざしたい
 - 幼保も合わせて考えたい
 - ・発達段階に応じた学びとつける力。
 - ・中学生が園児の面倒を見るよさ。
- ◎進め方等
 - ・先に方針、ゴール等を示して進めた方がよい。
 - ・辰野町として学校のあり方を考える時期に来ている。
 - ・今の進め方は、丁寧な進め方でよい。
 - ・財政の面を切り離して考えることはできない。
- ◎「少子化の進展に対応した新たな学校」として、学校を集約せざるを得ない。

V 第5回 2024年（令和6年）11月25日（月）午後6時30分～

1 協議事項

（1）「辰野町の新たな学校」について、学習会と意見交換

「小中一貫校」と「義務教育学校」について事務局より資料に基づいて説明。それを受けて、質疑応答と意見交換を行う。

- ・長野県内の小中一貫教育校の現状はどのようになっているのか。
- ・義務教育学校の保護者の意識はどうか。
- ・長野県の教育の動向はどうか。
- ・教員が小学校、中学校の両方を経験することはとても意味がある。
- ・学校長が替わるにより、教育方針が変わることが心配。
- ・信濃小中学校（義務教育学校）では、100回以上の検討会議により、子どもたちのために様々な準備をして開校している。
- ・自分たちが、このことにどれだけ情熱を傾けることができるかが大事。課題をみんなで解決しながら前へ進んでいきたい。
- ・いずれにしても、小中一貫校、そして義務教育学校にしていかなければいけない。
- ・私たちが学校に求めるものは何かを検討して、その延長線上に学校のあり方があってほしい。
- ・この検討が、財政の問題も含めて、どのような形で整理されていくのか。

VI 第6回 2025年（令和7年）1月30日（木）午後6時30分～

1 協議事項

（1）「小中一貫校」と「義務教育学校」についての学習会

「小中一貫校」と「義務教育学校」について、前回残された課題を中心に学習会を行い、理解を深めた。

（2）グループ討議「学校をどう集約していくか」

これまでの討議等をもとに、2グループに分かれてグループ討議を行う。

◎学校をどう集約していくか

- ・段階的に、小学校を一つにして、それから小中学校1校（小中一貫教育校）にする。
- ・小学校の集約については、既存の建物を使うのがよい。
- ・段階的に進めると時間がかかるので、一気に進めた方がよい。
- ・小中一貫教育校は、義務教育学校がよい。

長いスパンの教育 自由なカリキュラム 個性能力を伸ばせる ・ 小学校中学校は、建物を分けた方がよい ・ 既存の建物を使うのがよい ◎その他 ・ 町民への周知、地域の理解が必要である。 ・ スピード感をもって進めたい

VII 第7回 2025 年（令和 7 年） 5 月 21 日（水） 午後 6 時 30 分～

1 協議事項

（１）グループ討議「「集約した学校でどのような学びを保障するのか」「多様化する子どもたちに対応した学校はどうあったらよいか」「地域との連携をどのようにしていったらよいか」

◎集約した学校でどのような学びを保障するのか ・ 柔軟な発想で様々な体験ができる。（自然体験、社会体験等） ・ 多様な考え方に触れる学び。（異学年との交流・地域との交流等） ・ 多くの友だちと学び合い、高め合えるようにする。 ・ キャリア教育等社会とつながる学び。 ◎多様化する子どもたちに対応した学校はどうあったらよいか ・ 特別な支援が必要な子どもも共に学ぶ。 ・ 多様な背景を持つ子どもたちが共に学ぶ学校。 ・ 不登校・不適応傾向の子どもに対する手厚い支援。 ・ 人間関係の状況の変化に対応できる場所を確保する。（人間関係〈友だち・先生・家庭等〉、いじめ等） ◎地域との連携をどのようにしていったらよいか ・ 学校が集約されると、子どもたちにとっては学ぶ地域が広がるよさがある。 ・ 地域を学ぶ機会を作ったり、地域行事に参画する機会を意図的に作ったりする。 ・ 子どもたちが地域のことを学ぶ機会を大事にする。縦割りで地域のことについて学ぶ。 ・ 学校支援ボランティア等地域とのかかわりを引き続き残す。 ・ 集約された学校に地域住民が入ることで、伝統が引き継がれていく。 ・ 公民館等人が集まる機能を備える。平日に学校を開放する。 ◎その他

- ・今ある学校のよさを引き継いでいく。
- ・辰野町の教育ビジョンとリンクさせ、辰野町に合ったやり方で学校づくりを進める。
- ・辰野町の学校に通いたいというような学校をつくる。
- ・お金をかけてしっかりとした施設にする。町のバックアップが必要である。
- ・小中の敷地は一体にして、中1ギャップの解消をはかる。
- ・やわらかい発想で、学校教育を変えていく。
- ・家庭教育も大事に考える。
- ・先生方に余裕のある学校にする。
- ・先生方の意見も聞きながら進めていく。
- ・みんなが分かりあったうえで、統合を進めていく。
- ・10年先のことを決めるリスクも考えたい。
- ・学校がなくなること、若者の流出、子育て世代の居住地の選択から外れてしまう。
- ・市町村を越えて考えていくことも必要である。

VIII 第8回 2025年（令和7年）7月21日（金）午後6時30分～

1 協議事項

（1）小中一貫教育の方向を確認

集約した新たな学校では、小学校と中学校が同じ教育目標のもと、義務教育9年間の教育課程を系統的に編成した教育活動を行う小中一貫教育を推進していく方向を全体で確認した。

（2）全体討議「集約した学校で、子どもと地域とのかかわりをどのようにしたらよいか」

◎子どもたちが地域を学ぶ

○地域のことを学習

- ・生活科、社会科、総合的な学習の時間等で地域のひと・もの・ことを中心に多くのことを学んでいる。
- ・幼稚園・保育園との交流も盛んである。
- ・低学年は、身近な地域で学ぶことが大切だが、集約するとそれが難しくなる。
- ・中学校では総合的な学習の時間で、町のことを学び、町への提言をすると共に、自らの生き方を考えることにもつながっている。
- ・中学校では、現在も地域とつながりのある学びはたくさんあり、これはずっと続いていくと思う。
- ・地域の人に支えられているということ、地域の人のおいを学んでほしい。

- ・人と人とのかかわりを学んでほしい。
- ・五感を使った体験を大事にしてほしい。

○地域行事への参画

- ・ほたる祭り、地域のお祭り、地域の文化祭等に出演したり作品を出品したりと多くの参画が見られる。
- ・地域行事を通じて、地域の子どもの地域で育てていきたい。
- ・地域の温度差が大きい。
- ・分館の行事等で地域の子どもの育てたい。
- ・地域の行事に子どもが集まらない。地域の行事が大事にされていない。
- ・地域の行事が子どもたちにとっておもしろいと感じられるものになっているか。

◎学校と地域との連携

- ・学校支援ボランティアとして、学習支援、環境整備、安全確保、行事支援等で多くのかかわりが見られる。
- ・子どもにとって、自分の家族が地域や学校とどのように関わっているのかがその子の将来につながるのではないか。
- ・組織さえ作れば、集約した学校であっても、今の連携は可能である。
- ・学校からのほたらきかけで地域との連携を考えていくことは可能である。
- ・地域とのつながりが中学校の教育課程にたくさん組み込まれている。
- ・集約しても、町全体で子どもたちを見ていきたい。
- ・学校ボランティアは未来への投資である。
- ・地域の大人と気軽に話せる環境が大事である。
- ・地域の大人との触れ合いが、コミュニケーション能力につながると思う。

◎その他

- ・子どもたちが大人になった時に地域に残ってほしいという視点が大事。
- ・地域の学びが少なくなっても、学校を集約することの方が子どもの学びにとってメリットが大きいのであれば、仕方がない。
- ・学校は、その地域にとって大きな比重を占める。大事な資源の一つである。
- ・ICT教育も扱ってほしい。
- ・子どもたちには将来グローバルな立場で働いてほしい。外に出た方が面白いし、帰っても仕事がないという現状もある。
- ・地域に残ることが、子どもたちにとって幸せなのか。
- ・学校にとって、地域にとって一番大事なものは子どもである。
- ・主体的な行動、主体的な学びのためには五感を使った学びが大事である。

IX 第9回 2025年（令和7年）9月30日（火）午後6時30分～

1 協議事項

（1）全体討議「検討事項にかかわっての論点整理」について

- ・少子化の進展に対応した新たな学校づくりについて
- ・就学前から一貫した支援・指導のあり方について

第1回から第8回までの検討の結果を整理した「論点整理」について、全体で検討した。

◎3つの小学校を集約するにあたっての課題

- ・「めやす」「基準」を設けるべきではないか。例えば「1学級で10人を切ったら」「1～6才児の合計が60人を切ったら」といったように。
- ・安全な通学環境を考慮したい。

◎地域とのかかわりにおける課題

- ・地域の人と子どもたちとの顔の見える関係 時間、空間、しくみが必要である。
- ・低学年の子どもたちが「地域」をどのように学ぶか考えたい。
- ・保護者、PTA とのかかわりも大事にしたい。

◎幼保・小のつながりについて

- ・お互いに学び合うかかわりを大事にしたい。
- ・小学校の「評価」が幼稚園での評価と変わってしまうことが課題である。
- ・小学校でも引き続き一人一人を大事にしてほしい。

◎「五感を使った学び」を大事にしたい

- ・心の安定が不登校の減少につながる。

◎多様化する子どもについて

- ・年々増えている外国籍（外国にルーツのある）の子どもについて大事に考えたい。

◎その他

- ・次期学習指導要領の方向も踏まえて考えたい。
- ・広域（箕輪町と）で考えることも必要ではないか。

X 第10回 2025年（令和7年）11月20日（木）午後6時30分～

1 協議事項

（1）全体討議「検討事項にかかわっての論点整理」

- ・少子化の進展に対応した新たな学校づくりについて
- ・就学前から一貫した支援・指導のあり方について

前回の委員会での検討を受けて加除修正した「論点整理」について、全体で検討した。

- ・「小中一貫教育」については、委員会でまとめられたことなのか。
→第8回委員会において全体で確認した。
- ・「小中一貫教育」は、学級数確保のため、やむなくそうするというイメージが強い。
- ・小学校から中学校への進学は子どもにとって一つの節目になるのだが、一貫教育にするとそれがなくなる。変われるチャンスもなくなってしまう。
→例えば4・3・2と分けることで、それぞれのステップが節目となり、次のステップへの期待が持てることになる。
- ・「道草ができない」ことは大きな課題なのか。「地域の自然や地域社会と触れ合う機会が減る」という表現はどうか。
- ・『学校の姿』を十分な検討を行ったうえで進めていきたい」とあるが、今まで『学校の姿』を皆で話し合ってきたのではないか。
- ・「保護者・PTA」という言葉がない。
- ・どういう検討をしてどういう結論に位置づいたかという流れがよくわからない。
- ・「小学校の集約」と「小中一貫教育」の関係がわからない。
- ・検討事項の①②③についてはまとめてあるが、abcに沿ってはまとめられていない。
- ・「小中一貫教育」は既に両小野小中で実施されているので、成果等は参考にすればよい。
- ・次期学習指導要領では、様々な背景をもつ子どもが柔軟性をもって共有できる環境が求められている。
- ・「集約する目安や基準、ルールを設ける」という意見もあったということを載せておいてほしい。

XI 第11回 2026年（令和8年）2月24日（火）午後6時30分～

1 協議事項

- （1）全体討議「パブリックコメントに対する回答」について
- （2）全体討議「提言書（案）」について